男子看護学生が感じている学習上の困難の内容
― 第 1 報 ―

Learning Problem of Male Student Nurses
― First Report ―

市川裕美子・佐藤真由美・坂本　弘子

要約　本研究の目的は、看護師を目指す男子看護学生が、学習や実習をしていく上で困難と感じていることを明らかにし、今後の学習環境整備や指導方法について検討することである。本学に在籍する男子看護学生 29 名に対し、自作の調査用紙で調査し、次のような結果を得た。1. 講義においての困難は、母性看護学が多かった。2. 技術演習においての困難は、肌の露出や皮膚の接触を伴う技術での困難が多かった。3. 臨地実習では気まずさが一番で、グループ構成や女性患者への援助、母性看護実習での困難があげられた。男子看護学生では、性差による葛藤や困難さが明らかに存在していることがいえ、教員は、男子看護学生が感じたり体験する困難の内容を理解し、学習環境整備や指導をしていくことが必要である。

I. は　じ　め　に

平成 22 年日本の就業看護師総数は 952,723 人（男性 53,748 人、女性 898,975 人）で、平成 20 年度より 75,541 人増加しており、男性看護師は 8,864 人（19.7%）増加している（平成 22 年厚生労働省衛生行政報告）。男性看護師は就業看護師総数の 5.6% にとどまっているが、毎年増加傾向にある。

本学看護学科は 2009 年に開学し、毎年男子が 10 名程度（学生の約 1 割）入学している。筆者らは、技術演習・臨地実習の指導や日頃の学習態度から、人数が少なく特別扱いされがちな男子看護学生の学習環境の整備や指導方法について検討していく必要性を感じていた。男子看護学生についての先行研究では、母性看護学実習における様々な課題の報告がされている。これらの研究では、特定領域における学習経験の意味や圧倒的多数が女性によって構成される職業の中に、性別の異なる男性が加わることにより生じる問題に焦点があてられているものが多い。

そこで、本学の男子看護学生を対象に、職業選択の理由、学習上の困難の内容などについて調査し、今後の学習環境整備や指導方法について検討することを目的として本研究に取り組んだ。

II. 研　究　目　的

看護師を目指す男子看護学生が、学習や実習をしていく上で困難と感じている内容を明らかにして、今後の学習環境整備や指導方法について検討する。

III. 研　究　方　法

1.　調査期間：平成24年11月1日～平成24年11月20日

2.　対象：本学看護学科在学中の男子看護学生全員29名

（内訳）1学年8名、2学年8名、3学年9名、高学年4名

3.　調査方法：無記名による選択方式、一部自記式の質問紙を作成し、対象となる学生に調査目的・調査協力依頼と倫理的配慮について記載した文書を口頭で説明を加え配布し、回答は同封の封筒で郵送または学内にある筆者のレターポストに個別に投函する方法とした。

4.　調査内容

①　対象者の学年、②　看護師を目指した理由、③　学習上の困難の内容について（講義、技術演習、臨地実習）、④　今後改善してほしい内容、⑤　その他

5.　分析方法

選択方式については学年別に単純集計をし、自由記載については研究者3名で討議し、内容の分析を行った。

6.　倫理的配慮

八戸大学・八戸短期大学倫理審査委員会の承認を得た。

IV.　結果（以下％は、小数第2位を切り捨てとした。）

1.　回答数と回収率

配布数29名のうち回答数21名、回収率72.4%であった。学年別内訳は、1学年8名中7名、2学年8名中4名、3学年9名中6名、高学年4名中4名で、すべてを有効回答とし分析対象とした。

2.　看護師を目指した理由（表1）

看護師を目指した理由では、生活・経済的に安定していると思ったからが11名で最も多かった。次いで、人の役に立つ仕事をした

いと思った8名で、身近に看護師をしている人がいる、家族や知人に勧められた、看護師にあこがれたからが各7名であった。

3. 講義において困難を感じている科目（表2）

講義において困難を感じている13名（61.9%）で、感じていない8名（38.0%）であった。科目については複数回答で、母性看護学が8名と一番多く、理由は、「母性看護学は自分が男であるからイメージがつきにくい」「母性イコール女性のイメージがありなじみにくい」などであった。次いで成人看護学、その他では解剖生理学と各3名が答え、理由は、「範囲が広い」「難しい」「覚えるのが大変」などであった。

4. 講義において困難を感じている理由（表3）

困難を感じている理由では、グループワーク等の構成が5名、女性優位、発言しにくいが各4名であった。理由は、「とにかく肩身が狭い」とか、「男性が少ないからグループワークなどで発言しにくい」「女性のほうも発言や提案がしにくそうである」などであった。

5. 技術演習において困難を感じた看護技術（表4）

技術演習において困難を感じている10名（47.6%）で、感じていない11名（52.3%）であった。看護技術項目は複数回答で、体位変換が4名で最も多かったが、その他の全項目に対し2〜3名が困難を感じていると答えた。理由は、「演習とはいえ女性との密着があるのでお互いに気まずい」「女性患者に気遣いをしなければならなかった」「やりにくさがある」などであった。

6. 技術演習でその他に困難を感じていること（表5）

技術演習でのその他の困難では、異性への気遣い5名で、次いで接触の気まずさ4名、やりにくさ3名であった。理由は、「相手の気分が気になる」「援助される側もどこかギクシャクしている感じでやりにくさがあった」などであった。

7. 臨地実習において困難を感じていること（表6）

臨地実習において困難を感じている13名（61.9%）、感じていない8名（38.0%）であった。内容では、気まずさ6名、指導者のかかわり5名、学習機会の不平等、対象者の警戒心が各3名であった。理由は、「実習グループでも男子1人だとつらい」「女性・男性への態度の違い」「同世代の女性患者さんに援助をするときかなり気まずい」「褥婦の看護や分娩見学は、たとえ患者から許可がでていても性の壁を考えてしまうため積極的にできない」など、母性看護学に関することが多かった。

8. その他困難と感じていること（自由記載）

「ロッカーが狭い・遠い」「あらぬ噂がたつ」「私語で度をこえる人がいる」

9. 男子看護学生でよかったこと（自由記載）

「男子学生だからとかでなく、皆と仲良くできているため満足している」

「必要とされているのがわかる。男の孫や子供がいると話しやすくうちとけやすかった」

「少ない人数だからみんな仲良し」

「友達グループが何個もなく、まとまりが

あって居やすい」

「健康診断など早くやらせてもらえる」

「教員も女性が多く、男子に対するあたりが女性ほど強くない印象がある。女社会の影響をあまり受けない」

「人数が少ないため勉強など協力して行えるが、実習で離れてしまい女子の多数いる中に男子１人で、助け合うときに仲良くやっていけるか不安になり考え込んでしまうのではないかと感じた。自分は同じグループの女子はみんな優しく、助け合いながら実習できた」

「実習グループのメンバーがよくしてくれたため（平等に接してくれた）、協力し合い実習を終えることができた」

10.　今後改善ほしい内容（自由記載）

「実習グループで男子学生を１チームに２人入れてほしい」

「学内のグループワークや演習などでのメンバー分けを男性が発言しやすいように配慮してほしい」

表１　看護師を目指した理由（複数回答）

単位：名

理　　由	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　家族や知人が看護師で影響を受けたから	3		2	2	7
(2)　家族や知人に勧められたから	2	2	1	2	7
(3)　これまでの自分の体験から看護師にあこがれたから	2	2	3		7
(4)　人と関わる仕事がしたいと思ったから	2		2	1	5
(5)　人の役に立ちたいと思ったから	3	1	2	2	8
(6)　生活・経済的に安定していると思ったから	3	3	3	2	11
(7)　その他：就職に困らない、医療関係の仕事につきたかったから		2			2

表２　講義において困難を感じている科目（科目は複数回答）

困難を感じている：13名（61.9%）　感じていない：８名（38.0%）　単位：名

科　　目	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　看護学概論	1				1
(2)　日常生活援助技術論	1				1
(3)　回復促進援助技術論	1				1
(4)　成人看護学Ⅰ	1	2	1		4
(5)　成人看護学Ⅱ	1	1	1		3
(6)　高齢者看護学	1	1			2
(7)　小児看護学	1				1
(8)　母性看護学	1	3	2	2	8
(9)　精神看護学	1		1		2
(10)　在宅看護学	1	1			2
(11)　統合看護学	1				1
(12)　その他：解剖生理学	3				3

困難の理由：「範囲が広い」「難しい」「覚えるのが大変」「母性看護学は自分が男であるからイメージがつきにくい」「母性イコール女性のイメージがありなじみにくい」「母性の実習でアウェー感があったため、どの部分が大切なのかをもっと明確にしてほしい」

表３　講義において困難を感じている理由（複数回答）

単位：名

理　　由	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　教員の男子学生への対応			1		1
(2)　学習目的が不明瞭		1			1
(3)　学校の姿勢			1		1
(4)　男女の性別意識					0
(5)　役割差		1			1
(6)　女性優位		3	1		4
(7)　目立つ		1		1	2
(8)　発言しにくい		3	1		4
(9)　グループワークなどの構成		3	2		5
(10)　その他：なし	1				1

困難の理由：「男子だから、みたいな発言をよく聞く」「とにかく肩身が狭い」「女性のほうも発言や提案しにくそうである」「男性が少ないからグループワークなどで発言しにくい」「グループ分けのときグダグダになる、事前に決めておいたほうがスムーズ」「男子１人になるため何を行うにも難しい点があった」

表４　技術演習において困難を感じている看護技術（項目は複数回答）

困難を感じている：10 名（47.6%）　感じていない：11 名（52.3%）　　単位：名

看護技術項目	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　清拭	1	1			2
(2)　部分浴	1				1
(3)　陰部洗浄	2	1			3
(4)　洗髪	1				1
(5)　尿器・便器介助	2				2
(6)　オムツ介助	2		1		3
(7)　導尿	1	1			2
(8)　浣腸	1	1			2
(9)　食事の介助	1	1			2
(10)　体位変換	1	3			4
(11)　トランスファー	1	1			2
(12)　バイタルサイン測定	2				2
(13)　母性看護技術演習	1		2		3
(14)　その他：実際人に行うと考えると気持ちが下がる	1	1			2

困難の理由：「演習とはいえ女性との密着があるのでお互いに気まずい」「女性患者に気遣いをしなければならなかった」「やりにくさがある（女子学生も思っていると思う）」「うまくできない」「女性の中に男性１人だけでお互い気を遣うから」

表５　技術演習でその他に困難を感じている内容（複数回答）　　単位：名

その他の項目	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　メンバー構成			1		1
(2)　多様な相手または男子学生同士での練習ができない					0
(3)　効率が悪い		1	1		2
(4)　学びの深まりがない		1			1
(5)　組み合わせ			2		2
(6)　羞恥心	1		1		2
(7)　やりにくさ		2	1		3
(8)　接触の気まずさ		2	2		4
(9)　異性への気遣い		3	1	1	5
(10)　女性優位		1	1		2
(11)　教材モデルにされやすい		1			1
(12)　設備や物品					0
(13)　男女のプライバシー			1	1	2
(14)　その他：なし	1				1

困難の理由：「相手の気分が気になる」「援助される側も、どこかギクシャクしている感じでやりにくいときがあった」「メンバー構成の組み合わせで男子が少ないと気まずい」「お互いやりにくさがあった」

表６　臨地実習において困難を感じている内容（内容は複数回答）

困難を感じている：13名（61.9%）　感じていない：8名（38.0%）　　単位：名

困難を感じた内容	１学年	２学年	３学年	高学年	計
(1)　学習機会の不平等（経験できないことがある）			3		3
(2)　援助内容による拒否			1		1
(3)　受け持ち拒否				1	1
(4)　居場所がない			1		1
(5)　気まずさ	3		2	1	6
(6)　対象者の警戒心	1	1		1	3
(7)　練習相手の不在			1	1	2
(8)　１人のつらさ	1		1		2
(9)　女子学生への負担			1		1
(10)　指導者のかかわり	1	1	1	2	5
(11)　施設設備					0
(12)　その他：実力不足	1				1

困難の理由：「実習グループでも男子１人だとつらい」「女性・男性への態度の違い」「褥婦の看護や分娩見学は、たとえ患者が許可を出したとしても性の壁を考えてしまうため積極的にできない」「同年代の女性患者さんに援助をするときかなり気まずい」「母性の実習時にどこの部屋に入るときも気を遣うし、悪露観察や乳房触診は女子学生から聞いてアセスメントするしかない」

V. 考　　察

今回の調査では、人数が少ない男子看護学生が学んでいくうえで、どのような困難を感じているかについて明らかにし、学習環境整備や指導方法検討のための一助とすることを目的とした。調査結果から、学習上の困難の内容を 1. 講義 2. 技術演習 3. 臨地実習 4. その他の 4 項目に分けて、教員の指導方法などについても含め考察していく。

1.　講義について

講義について困難だと感じている男子看護学生は 13 名（61.9%）であった。科目では、先行研究にも多く発表されている母性看護学が最も多く、その理由としては性差に関連したものであった。教員は授業計画を立案する際に、学生の性の特性を意識しなければならない場合と専門職の学習内容として男女を同一化してよい場合を意図的に考えていくことが必要となる。また、女子看護学生を中心とした授業進行にならないようにしなければならない。次に成人看護学や解剖生理などについては、範囲が広いことや内容の理解ができないなどの理由で困難さを感じている。教員が授業内容や展開を検討したり、工夫していくことも必要であるが、学生自身が不得意なところを明らかにして、自律して学習ができるよう指導し、関わっていくことも必要である。

講義において困難を感じている理由として、グループワークなどの構成や女性優位の回答が多かったことは、大多数をしめる女子看護学生の中にあって、圧倒されたり、その勢力に影響を受けたりすることを示していると考えられる。

2.　技術演習について

技術演習では、学習上の困難を感じている 10 名（47.6%）、感じていない 11 名（52.3%）でほぼ同数であった。看護技術の項目では、体位変換やオムツ介助・陰部洗浄など女子看護学生との皮膚の接触を伴う看護技術や肌の露出、性に関する項目であった。理由としては、異性への気遣いや接触の気まずさが多く、青年期にある学生は、性の成熟が進行し身体的変化やそれに伴う心理的・社会的発達もみられ、人生において最も変化が激しい時期であり、発達段階を反映した内容と考えられる。また、直接肌が触れる技術では、異性として意識することで、学習の困難を強くする可能性が考えられ、経験項目の偏りや学習が深まらないことにつながることも考えられる。

看護学生としては、性を超えた学習の必要性について自覚していると考えられるので、教員は、看護専門職として技術習得ができるよう留意することが重要と考える。演習時のグループメンバー構成に当たっては、演習内容や学習効果を検討したうえで、場合によっては学生の意見も取り入れて編成するなどしていくことを検討する必要がある。

3.　臨地実習について

臨床実習については、困難を感じている 13 名（61.9%）、感じていない 8 名（38%）の結果であった。その内容としては、気まずさ 6 名が一番多かった。「同年代の女性患者に対しての援助は、かなりきまずい」という理由もあり、看護師として成長しようとするときに、どうしようもない性差が立ちはだかるのではないかと考えられる。

対象者の警戒心は3名で、男性看護師は女性患者に援助を断られることも多いと、先行研究で発表されている。歴史的にみると、看護や介護などは「女性的職業」という意識が強く、このような背景から、女性患者は男性が看護援助を行うことに違和感を感じるのではないかと考える。女性患者に対する看護援助では、いずれ男子看護学生が看護師として働いたときにも、現場で経験する理不尽と不合理な思いとなり、困難感や葛藤へとつながる可能性が高いと考えられる。臨地実習では、男子看護学生が受け持ち患者を決定する場合や実際援助を行う場合に、男性であるがゆえに余儀なくされる理不尽や不合理を理解し、特段の配慮を行うことが必要であると考えられる。

また、母性看護実習では、「悪露観察や乳房触診は、女子学生から聞いてアセスメントするしかない」と答えており、教員はカンファレンスなどを通して、情報提供や共有・既習の内容と統合できるように関わっていくことが必要であり、その理解度についても確認する必要があると考える。

困難を感じた内容として、臨地実習においての指導者のかかわり5名（23.8%）の結果からは、教員は指導者との「報告・連絡・相談」を密に行い、学生が臨地実習していく上での環境整備や指導体制・方法などについて十分な調整を行っていくことが必要である。

4.　その他

男子看護学生の、その他困難と感じている内容に、ロッカーの広さや場所について記入されていた。施設整備については、現在あるものを有効かつ効果的に使用できるように工夫していくことを検討することも必要だと考える。調査での記入はなかったが、演習で使用する物品の準備などでは、大きさの問題などもあるので配慮が必要であると考えている。

また、男子看護学生は学年の約1割と少数であり、まとまっているなどの記入がされていたが、グループメンバー編成などにおいては配慮してほしいなどの内容が記入されていたことに関しては、この調査結果や「男性」「看護学生」ということを理解しつつ、効果的・確実な学習ができることを考え行っていくことが必要である。

VI.　結　　論

1.　講義においての困難は、自分が男子であるからイメージがつきにくいや性差の理由で、母性看護学が特に多かった。

2.　技術演習においての困難は、体位変換やオムツ交換・陰部洗浄などの肌の露出や皮膚の接触を伴う看護技術が多く、理由は青年期の身体的・心理的・社会的発達段階を反映していると考えられた。また、講義・臨地実習より困難と感じていると答えた人数がすくなかった。

3.　臨地実習では気まずさが一番で、指導者のかかわり、学習機会の不平等、対象者の警戒心の順に多かった。特にグループ構成や女性患者への対応、母性看護実習での困難を

感じていた。

4.　男子看護学生では、性差による葛藤や困難さが明らかに存在していることがいえる。教員は、男子看護学生が感じたり体験する困難の内容を理解し、学習環境整備や指導をしていくことが必要である。

VII.　お　わ　り　に

今回の研究では、21 名の回答結果から男子看護学生が感じている学習上の困難の内容を明らかにした。看護は性を超えた援助が必要であることは意識できていても、性差はどうしてもたちはだかってしまうこともある。年々一般病棟に勤務する男性看護師も増えてきており、今後も男性看護師に関する研究なども参考にしながら、男子看護学生への看護教育方法の工夫などについて検討していきたいと考えている。

VIII.　謝　　辞

この研究に、ご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

＜参考引用文献＞

1. 「衛生行政報告例（就業医療関係者）結果の概要」，厚生労働省ホームページ http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/10/dl/h22_hojyokan.pdf（2012 年 10 月 25 日現在）.
2. 高橋順子他「女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難」『四国大学紀要』（A）33.161-168.2010.
3. 松田安弘他「男子看護学生の学習経験に関する研究」『看護教育学研究』10.1.2001.15-28
4. 小藤祐子他「一般病棟に勤務する男子看護師が女性患者の看護ケアをする体験」『日本看護研究学会誌』35.3.2012.63-69.
5. 安酸史子他『成人看護学概論』メディカ出版．2011.
6. 矢原隆行「看護教育の場におけるジェンダー構築－男子看護学生をめぐる状況－」『看護教育』42.1.2001.34-38.
7. 松田安弘「看護における性の異なる少数者の経験　男子看護学生と男性看護師の経験の統合」『看護研究』37.3.2004.253-262.
8. 高橋久恵「男子学生の臨床実習上の問題点と方向性　学生、患者、臨床指導者のアンケート調査より」『看護教育』30.3.1989.154-159